格の學問研究にしてこそ眞に特別の保護と激勵を享くるに値するものであるとする編述者の堅い主張より來てゐるのである。

外人に依る日本研究も既に前世紀までの聞見錄・紀行・日本誌類の域を遠く去つて、今や邦人と對等の位置に於いて日本文化の特質を論究しつゝある。かゝるとき本誌の如き確固たる意圖と方針を有する學術雜誌の出版は、吾々日本人のためにも、刻下の現實的課題である日本民族の特殊性や、その文化の獨創性の問題に對して、極めて示唆に富む解答を提出するものとして注目せられるのである。(東京市麴町區紀尾井町七、上智大學發行。各冊三〇〇頁內外、定價五・〇〇)(稻葉慶信)

日支交通の研究 中近世篇

藤田元春著

何よりも歷史地理學者であり又支那に關して深い造詣を持たれる著者がこの好題目をとらへ來つたことは寧ろ當然のことであるとはいへ、この一篇の勞作は常々これらの問題に心をとめてゐる我々にとつてはこよなく愉しい訪れでもある。

章を分つこと十一、元明時代の交通の概說に初まり、シラの島とゴーレスの問題を論じ、薩摩人の南海に於る活躍を叙して琉球と南越の日文交通に於る意味を明かにし、更に室町時代の遣明使等の入唐記を研究して當時の交通路と貿易の實際を語り併せて明人の日本に關する地理的知識を述べ、繼つて元和航海記を今日の地理に對照して我國人の正確な海路知識を語り、石橋博士所藏の世界圖及びその類本が又當時の海圖を原本とするものと推し、續いて暹羅國風土軍記中の暹羅國行程及び青木昆陽の續草虛雜談に見ゆる海路等を考證して再び我國人の南洋航海知識を說き、近世大船建造の禁以後も尙かゝる雄圖と航海知識の存したことを水戸光閎の所謂蝦夷探險船について立證し、最後に日本海に於る造船の發達を古代より說き來り、又舶用羅針盤の我國人によつて先鞭をつけられた事實を明かにして日本の航海術の爲に虹のやうな氣焰を吐いて全篇を閉ぢる。讀過すれば主題は主題を呼び各章互に相應じて宛も讀者をして南海の潮騷をまのあたりに聽く想ひあらしめるであらう。殊に著者の警拔なる卓見を見るべきはゴーレス問題に就いての一章であらうか。あの浪漫的なゴーレスのふるさとは、一五五四年のモヒトの印度洋圖、或はゲオルギオの報告に基く一五八四年版のオルテリウスの日本圖に現れたゴールの地名を薩南郡に比定することによつて、我が南陲薩摩に求められたのである。蓋し古地圖に於る考證は著者の獨壇場ともいふべく、その天馬空を行く推論と共に、當にこの一章に止まらず本書の全體に亙つて奕々たる光彩を放たしめてゐる。

然しながらこのやうな中世以降の南海に於る我國人の戰鬪的な或は平和的な活動は、どのやうな構造を持ち、いかなる人々によつて負はれてゐたのであらうか。著者がメンデス・ピントの Nautaquim に當てた堺の納屋貸衆の如きはこのやうな問題に立入るいとぐちとして甚だ興味あるものであるし、その外にも同樣な示唆的なものが散見するにも拘らず、それ等がまだ著者の明快な

筆端に載せられてゐないのは殘念である。尙又、この書の主題である江南と我國とのかくまでもの親近が我々の文化の上にどのやうなものを齎してゐるかといふことも又一層知り度く思ふところである。これらの傳奇中の貿易家達が扇子や太刀や硫黃など〻交換してレヶヤの海を積み歸つて來たものは決して銅錢絹布の類のみではなかつた筈だからである。勿論これらの問題ははじめから本書の意圖するところではなかつたであらう。否、恐らくは著者が抱懷して居られるであらう更に雄大な構想の下に描かるべき日支交通の諸問題の基礎的な研究として、又これに關する新たなる視角への示唆として私は本書を高く評價したい。殊にその意味で元和航海記の研究の如き再讀三讀すべき貴重なる文字と思はざるを得ない。いふまでもなく我國土の理解は日支交通の歷史地理的な研究微くしては成立ち得ないものであらう。本書の前篇ともいふべき古代篇の刊行を鶴首すると共に、更にそれに續くべき著者の次作が炬火のやうに我々を照らす日を待望してやまない所以である。（菊版四二三頁、圖版二葉、東京富山房發行、定價參圓參拾錢）（室賀信夫）

漢六朝の服飾

原田淑人著

著者が既に大正十年『支那唐代の服飾』なる研究を發表され、以て絢爛たる唐代の服飾を復原し得られたことは學界衆知のことである。その際著者は同書に於いて「支那服飾の研究は先此時代（唐代）を闡明し然る後にその源泉に遡り又その流委に及ぼさざる可からず」と述べられて、將來の研究の繼續をほのめかされてゐた。そして爾來十數年を經てこ〻に『漢六朝の服飾』を公にされ、唐以前の支那服飾を明らかにし併せて前の『支那唐代の服飾』の訂誤を企てられたのである。

さて服飾に關しては書經益稷篇の十二章の冕飾をはじめとして古典記載のものは、三代の古制を傳へてゐると云はれるがもとより明かでなく、而も當時の遺物としては僅かに殷墟出土の貝製・骨製の服飾品を見るにすぎない。然るに漢代殊に後漢時代には冕服十二章をはじめ諸般の服制がとゝのつて實際的に行はれるやうになり、その後多少の變改あつたがその服制の大綱は大體踏襲されるに至つた。そして漢代には關係の文獻も相當な分量に上り且最近考古學の發展は當時の遺物資料を提供して、以て當時の服飾の具現化が或る程度可能である。とは云へ文獻による時服飾の立體的復原は充分でなく、是に於いて著者はよく文獻による縱橫なる考察を主とされ乍らも、同時に考古學的遺物に對する多年の經驗により、その困難に克たれて現實的に支那服飾が聳立して後の隋唐以後の支那服制に基礎を置いた漢六朝時代の狀態を髣髴せしめられてゐる。以下本書の梗概を述べて見よう。

第一章は絹布で先づ養蠶の中心地・機織の方法が述べられ、更に絹布の種類（錦・綾・綺・羅・縠・紗・平絹・刺繡・麻布・組）と產地が取扱はれてゐる。次いで問題の圖紋が取上げられ書經益稷篇の十二章に關する二說（孔安國・馬融の說と鄭玄の說）を批判